

宮沢賢治童話「二十六夜」に登場する 金色の三尊について

A Study on the three Bodhisattvas Appearing at Kenji Miyazawa
Children's Story “二十六夜”

高橋直美
TAKAHASHI Naomi

要旨

宮沢賢治童話「二十六夜」で二十六夜の月とともに現れる金色の三尊については梶の坊さんが本文で、「月天子山のはを出でんとして、光を放ちたまうとき、疾翔大力、爾迦夷波羅夷の三尊が、東のそらに出現します。」と説いている。この三尊の正体が何であるかについての先行研究は多いが、そのほとんどが三尊のモデルは「阿弥陀如来来迎図」であると指摘している。

本稿では、疾翔大力・爾迦夷^{るかい}・波羅夷^{はらい}という三尊の名称を基に、賢治が信仰する日蓮の教えや仏典・仏教説話等を参考にしながら、この三尊の意義とそのモデルについて検討した。

その結果、「二十六夜」に登場する三尊はあくまでも梶の世界でのものであるという前提で、疾翔大力は釈迦牟尼仏、爾迦夷は上行菩薩の再誕である日蓮、波羅夷は清浄の徳を持つ浄行菩薩であり、作品の意図は妙法蓮華経によるトシの成仏と自らをも含む一切衆生の謗法罪障消滅、そして『妙法蓮華経 化城喻品第七』にある「願以此功德 普及於一切 我等与衆生 皆共成仏道」であると考察した。

キーワード：二十六夜、疾翔大力、爾迦夷、波羅夷、日蓮、本尊、釈迦牟尼仏、上行菩薩、浄行菩薩、成仏、謗法罪障消滅、悉皆成仏

1. はじめに

本稿では、宮沢賢治童話「二十六夜」で二十六夜の月とともに現れる金色の三尊について考察する。この三尊については、梶の坊さんが、「月天子山のはを出でんとして、光を放ちたまうとき、疾翔大力、爾迦夷波羅夷の三尊が、東のそらに出現します。」と述べている。この三尊の正体が何であるかについては、先行研究の多くが「阿弥陀如来来迎図」を基に阿弥陀三尊であるとしているのに対し、呉善花は賢治所有の日蓮の曼荼羅の中心部であると述べている。このように二十六夜に現れる三尊については諸説ある。

本作品が鳥の世界での話であることを念頭に置きながら、疾翔大力・爾迦夷・波羅夷という三尊の

*東洋大学ライフデザイン学部生活支援学科 Toyo Univ. Faculty of Human Life Design
連絡先：〒115-8650 東京都北区赤羽台1-7-11

意義を解明するとともに、三尊のモデルについて賢治が信仰する日蓮の教えを中心に、仏典や仏教説話等から考察する。

2. 疾翔大力について

まず三尊の中心である疾翔大力について考える。本文に、

疾翔大力と申しあげるは、施身大菩薩のことじゃ。もと鳥の中から菩提心を発して、発願した大力の菩薩じゃ。疾翔とは早く飛ぶということじゃ。捨身菩薩がもとの鳥の形に身をなして、空をお飛びになるときは、一揚というて、一はばたきに、六千由旬を行きなさる。

(中略)

捨身大菩薩、必らず飛び込んで、お救いになり、その浄明の天上にお連れなさる(下線は筆者)とあることから、疾翔大力は捨身菩薩であり、施身大菩薩でもあることがわかる。また、下線部に捨身大菩薩とあるが、これは施身大菩薩の誤記だと考えられる。なぜならば、菩薩と大菩薩とでは位も役割も全く異なるからである。

疾翔大力は「もとの鳥の形に身をなし」た姿になることもでき、その姿かたちはまさに迦楼羅の如く、人型と鳥型との両方になる。

『法華義疏 序品』には「迦楼羅者。是金翅鳥」とあり、迦楼羅は『妙法蓮華經 觀世音菩薩普門品第二十五』では觀世音菩薩が衆生を救うために変化する三十三身の1つであると述べており、「應以天龍夜叉乾闥婆阿修羅迦樓羅緊那羅摩睺羅伽人非人等身得度者。即皆現之而爲說法。應以執金剛身得度者。即現執金剛身而爲說法。」と記されている。要するに、疾翔大力は施身大菩薩(大菩薩とは不退の位を得た菩薩)であり、梟にとっては妙法蓮華經により鳥族を救済する存在となる。

日蓮の弟子・日興は「就註法華經口伝 廿八品に一文充の大事」で「湧出品」にある「昼夜常精進 爲求仏道故」について、「この文は一念に億劫の辛勞を尽くせば、本来無作の三身念々に起こるなり。所謂南無妙法蓮華經は精進行なり」と記している。妙法蓮華經を信じればどのような境遇であれ、仏の本質である三身をそのままの姿で得ることができる。「無作の三身」とは「煩惱即菩提」や「生死即涅槃」といいかえることができるだろう。

また「就註法華經口伝 下」の「寿量品二十七の大事 第廿三久遠の事」にも、

御義口伝に云はく、此の品の所詮は久遠実成なり。久遠とははたらかさず、つくるはず、もとの俣と云ふ義なり。無作の三身なれば初めて成ぜず、是働かさざるなり。三十二相八十種好を具足せず、是れ繕はざるなり。本有常住の仏なれば本の俣なり。是を久遠と云ふなり。久遠とは南無妙法蓮華經なり。実成、無作と開けたるなり云云。

と記されており、妙法蓮華經を受持するものはありのままの姿で仏の境涯を得る(即身成仏)ことができると説かれている。

「二十六夜」には「捨身菩薩がもとの鳥の形に身をなして」として記されているが、仏教には化身の説話が多い。例えば雪山童子説話における雪山童子は釈尊の過去世の姿であり、虎は帝釈天の化身である。疾翔大力も梟(鳥)を救済するために、過去世の鳥の姿を取ることになれば、二十六夜に現れた一般的な菩薩の形をとることもある。

次に「空をお飛びになるときは、一揚というて、一はばたきに、六千由旬を行きなさる。」につい

てであるが、この六千由旬という数字は『長阿含經 第十九地獄品』にある「龍王宮卵生金翅鳥宮其宮各各縦廣六千由旬」等、宮殿の広さをあらわす大きさとして記されており、疾翔大力のすばらしさを表現している。

1由旬とは帝王が1日に行軍する道のりとされ、「由旬 (yojana) の再検証」(森章司・本澤綱夫)によると、4～23kmと考えられている。元雀である疾翔大力が「もとの鳥の形に身をなして」「一はばたき」で「六千由旬」を飛ぶが、「もとの鳥の形」にならないときは、「金いろの立派な」「せいも高く、大きな眼」の「お星さまをちりばめたような立派な瓔珞をかけ」た大菩薩となる。

これは『妙法蓮華經 提婆達多品第十二』で竜王の八歳の娘である竜女がそれまで不可能とされていた女性成仏と畜生成仏をしたと説かれていることをもとに、おなじ畜生である鳥が疾翔大力として成仏をしたことを述べていると考えられる。

次に疾翔大力の「大力」について考察する。

「就註法華經口伝 下」の「神力品八箇の大事 第一妙法蓮華經如来神力の事」には、

文句の十に云はく、「神は不測に名づけ、力は幹用に名づく。不測は即ち天然の体深く、幹用は則ち転変の力大なり。此の中深法を付嘱せんが為に十種の大力を現す。故に神力品と名づく」と。

御義口伝に云はく、此の妙法蓮華經は釈尊の妙法には非ず。既に此の品の時上行菩薩に付嘱し玉ふ故なり。総じて妙法蓮華經を上行菩薩に付嘱したまふ事は宝塔品の時事起り、寿量品の時事顕はれ、神力嘱累の時事竟はるなり。如来とは上の寿量品の如来なり。神力とは十種の神力なり。所詮妙法蓮華經の五字は神と力となり。神と力とは上の寿量品の時の如来秘密神通之力の文と同じきなり。今日蓮等の類南無妙法蓮華經と唱へ奉る処の題目なり。此の十種の神力は在世滅後に亘るなり。然りと雖も十種共に滅後に限ると心得べきなり。又云はく、妙法蓮華經如来と神との力の品と心得べきなり云云、如来とは一切衆生なり。寿量品の如し。仍って釈にも如来とは上に釈し畢んぬと云へり。此の神とは山王七社等なり。此の旨之を案ずべし云云。(下線は筆者)とあることから、十種的大力=十種の神力=妙法蓮華經となる。

宮沢賢治童話「十力の金剛石 (虹の絵具皿)」には「十力の金剛石」は「十力の大宝珠」であり、

急きに声がどこか別の世界に行ったらしく聞こえなくなりました。そしていつか十力の金剛石は丘いっぱい下っておりました。そのすべての花も葉はも茎も今はみなめざめるばかり立派りっぱに変わっていました。青いそらからかすかなかすかな楽のひびき、光の波、かんばしく清いかおり、すきとおった風のほめことばが丘いちめんふりそそぎました。

とあるが、これは『訓読摩訶止観弘決會本 中』の、

如意珠の如きは、天上の勝宝なり。形は芥粟の如し。大なる功能有り。淨妙の五欲、七宝の琳琅、内に蓄えたるに非ず、外より入るに非ず、前後を謀らず、多少を扱はず、僞妙を作さず。意に称い豊儉なり。降雨すること穰穰たり。添えず尽きず。蓋し是れ色法、尚能く此くの如し。況や心神の靈妙なる。寧ろ一切法を具せざらんや。

と近似しており、「十力の大宝珠」は「如意宝珠」であると考えられる。しかも、この「如意宝珠」は日蓮の「如来滅後五五百歳始観心本尊抄」にある「一念三千を識らざる者には仏大慈悲を起こし、五字の内に此の珠を裹み、末代幼稚の頸に懸けさしめたまふ」珠でもあることから、「十力の金剛石」とは仏性であり、仏性を持つからこそ雀という畜生であっても即身成仏ができるのである。

本文では、疾翔大力は報恩のために捨身を行い、仏に巡り合ったと記されている。梶の坊さんが説法で、

はやこの上はこの身を以て親の餌食とならんものと、いきなり堅く身をちぢめ、息を殺してはりより床へと落ちなされたのじゃ。その痛さより、身は砕くるかと思えども、なおも命はあらしゃった。されども慈悲もある人の、生きたと見てはとても食べはせまいとて、息を殺し眼をつぶっていられたじゃ。そしてとうとう願かなってその親子をば養われたじゃ。その功德より、疾翔大力様は、ついに仏にあわれたじゃ。そして次第に法力を得て、やがてはさきにも申した如く、火の中に入れてもその毛一つも傷つかず、水に入れてもその羽一つぬれぬという、大力の菩薩とられたじゃ。

と述べているが、この「捨身」「施身」について、日蓮は「聖愚問答抄」で、

但し仏法は強ちに人の貴賤には依るべからず、只経文を先きとすべし。身の賤きをもて其の法を軽んずる事なかれ。有人樂生悪死有人樂死悪生の十二字を唱へし毘摩大國の狐は帝釈の師と崇められ、諸行無常等の十六字を談ぜし鬼神は雪山童子に貴まる。是必ず狐と鬼神との貴きに非ず、只法を重んずる故なり。

と、「種々御振舞御書」では、

雪山童子は半偈のために身をなげ、常啼菩薩は身をうり、善財童子は火に入り、樂法梵士は皮をはぐ、藥王菩薩は臂をやく、不輕菩薩は杖木をかうむり、師子尊者は頭をはねられ、提婆菩薩は外道にころさる。此等はいかなりける時ぞやと勘ふれば、天台大師は「時に適ふのみ」とか、れ、章安大師は「取捨宜きを得て一向にすべからず」とするさる。

と、「佐渡御書」には、

仏法は摂受・折伏時によるべし。譬へば世間の文武二道の如し。されば昔の大聖は時によりて法を行ず。雪山童子・薩埵王子は、身を布施とせば法を教へん、菩薩の行となるべしと責めしかば身をすつ。肉をほしがらざる時、身を捨つべきや。紙なからん世には身の皮を紙とし、筆なからん時は骨を筆とすべし。

と記し、捨身供養は「時」によって要不要があり、末法ではその必要がないことを説いている。日蓮宗の熱心な信仰者である賢治も当然それは理解していたであろうことは想像に難くない。

その一方で、浄土教には捨身往生という思想があるが、これは厭離穢土・極樂往生のために自ら命を絶つことであり、『法華玄義釋籤卷第一』等に記されている。日蓮も『御書』に登場する雪山童子は、半偈の為に羅刹（実は帝釈天）に身を投げた釈尊の過去世の姿であり、親子を救った疾翔大力とはその意義や存在が全く異なっている。

捨身菩薩（疾翔大力）は、前世の姿である雀が自らを犠牲にして飢饉で大飢渴（餓鬼道）に堕ちている家主の親子に自らを食べさせることで、死後、仏に会って修行をしたとある。薩埵王子は釈尊の過去世の姿であるがゆえに飢虎が元の帝釈天に戻り童子を助けたが、疾翔大力はただの雀であったため命を投げ出すことで仏の弟子になったのであろう。

雪山童子と同様に、日蓮の『御書』にたびたび登場する尸毘王の説話（『大智度論卷第四』等）も鷹（実は毘沙門天）に追われた鳩（実は帝釈天）の代わりに自らの肉を与えた尸毘王（釈尊の過去世の姿）の慈悲心により、帝釈天は尸毘王の傷を癒し、敬ったというものである。疾翔大力が雀であっ

た時の話は、尸毘王の説話に似てはいるが、仏法の守護神である帝釈天の救済がなく、記別を授かるのでもなく、ただ仏の弟子になったことを考えると、この時にはまだ成仏の境地を得ていなかったことがわかる。

また、疾翔大力の「火の中に入れてもその毛一つも傷つかず、水に入れてもその羽一つぬれぬ」については、呉善花等が『妙法蓮華経 薬王菩薩本事品二十三』の「所得福德。無量無辺。火不能焼。水不能漂。」の部分を用いたのではないかと指摘しているが、じつは同品には薬王菩薩の焼身供養も記されており、ここでも捨身供養が記されている。

「就註法華経口伝 薬王品六箇の大事 第四 火不能焼 水不能漂の事」には「御義口伝に云はく、火とは阿鼻の炎なり、水とは紅蓮の氷なり。今日蓮等の類南無妙法蓮華経と唱へ奉る者は此くの如くなるべし云云。」と、「第六 若人有病 得聞是経 病即消滅 不老不死の事」には「御義口伝に云はく、若人とは上仏界より下地獄の罪人迄摂すべきなり、病とは三毒の煩惱なり。仏菩薩に於ては不老は釈尊、不老は地と顕はれたり。是は滅後当今の衆生を説かれたり。然らば病とは謗法なり。此の経を受持し奉る者は病即消滅疑ひ無きなり。今日蓮等の類南無妙法蓮華経と唱へ奉る者は是なり。」と記されており、疾翔大力はまさに妙法蓮華経に守護されている存在であることが証明されている。

ちなみに、焼身往生・入水往生に関しては、『新纂浄土宗大辞典』に現世を厭わしく感じ、すぐに浄土に往生したいという気持ちの高まりから、水中に身を投じて、極楽往生を遂げる捨身往生があり、平安後期の浄土教の隆盛に伴い、日本では往生するために焼身・入水を行う人々が現れたとあることから、前述の疾翔大力の捨身供養とは異なることが分かる。ただし、捨身菩薩となった疾翔大力は仏に会い、『妙法蓮華経如来寿量品第十六』にある「一心欲見仏 不自惜身命」を行じて不退の位の菩薩（施身大菩薩）になったと考えられる。だからこそ、穂吉を迎えに来たのであろう。

次に、疾翔大力のモデルは誰かを考える。

疾翔大力は「たゞ報恩の一念」で捨身をしたとあるが、日蓮は「開目抄 上」に「聖賢の二類は孝の家よりいでたり。何に況んや仏法を学せん人、知恩報恩なかるべしや。仏弟子は必ず四恩をして知恩報恩をいたすべし」と記している。この「知恩報恩」とは、恩を受けていることを知り、恩に恩を報ずることであるが、「開目抄」では「知恩報恩」とは不惜身命で正法を弘通することと説かれている。ゆえに疾翔大力は妙法蓮華経により梟たちに救済をもたらす存在であることがわかる。

梟の坊さんの説法で、疾翔大力の前世は雀であるとされているが、雀は肉食ではないため、殺生の罪は梟よりも軽いと考えられる。反対に爾迦夷上人は梟であることから、同じ鳥であっても疾翔大力とは宿業の差がみられる。

日蓮は「日蓮今生には貧窮下賤の者と生まれ旃陀羅が家より出でたり」（「佐渡御書」）、「日蓮は安房国東条郷片海の石中の賤民が子なり」（「善無畏三蔵抄」）等と、自らが当時の身分制度でもっとも低いとされる階層の漁師の家の出自であると述べているが、釈尊は釈迦族のシッダールタ王子である。疾翔大力が梟ではなく雀であることは、おなじ鳥類でありながら殺生を基準にした身分の違いによるものであり、これは因果応報によるものであろう。

以上のことから、疾翔大力のモデルを考察すると、大正9（1920）年12月上旬保坂嘉内宛封書にある、

絶対真理の法体 日蓮大聖人 を無二無三に信じてその御語の如くに従ふことでこれはやがて

無虚妄の如来 全知の正徧知 殊にも 無始本覚三身即一の

妙法蓮華經如来 即ち寿量品の釈迦如来の眷属となることとあります(下線は筆者)がモデルになっていると考えられる。

しかしながら、あくまでも娑婆世界を模した鳥(梟)の世界のことであるため、如来ではなく、末法悪世に妙法蓮華經を弘める大菩薩(不退の位の菩薩)である疾翔大力が妙法蓮華經により鳥たちを救済するのである。

最初に述べた通り、先行文献の多くは二十六夜講と「阿弥陀如来来迎図」を結び付けて「金いろの立派な人」を阿弥陀三尊であるとしているのに対し、呉善花は阿弥陀三尊ではなく、日蓮の「十界曼荼羅」の中心部「南無妙法蓮華經 日蓮」であると指摘している。日蓮を信仰する賢治ゆえに呉の意見は的を射ているとも考えられるが、「南無妙法蓮華經 日蓮」は「妙法蓮華經」という法華本門の肝心(仏の悟り)であり、大菩薩ではなく、「四条金吾釈迦仏供養事」に、

三身の事、普賢經に云はく「仏三種の身は方等より生ず。是の大法印は涅槃海を印す。此くの如き海中より能く三種の仏の清浄の身を生ず。此の三種の身は人天の福田にして応供の中の最なり」云云。三身とは一には法身如来、二には報身如来、三には応身如来なり、此の三身如来をば一切の諸仏必ずあひぐす。譬へば月の体は法身、月の光は報身、月の影は応身にたとふ。一の月に三のこことわりあり、一仏に三身の徳まします。

と記されている。「仏の三身」である法身・応身・報身はあくまでも、仏の徳であるため、「二十六夜」にある「金いろの立派な人が三人」のように、菩薩の形をとって現れるとは考えにくい。

また、日蓮は「高橋入道殿御返事」に「其の時上行菩薩出現して妙法蓮華經の五字を一閻浮提の一切衆生にさづくべし。其の時一切衆生此の菩薩をかたきとせん」「此の時上行菩薩の御かびをかほりて法華經の題目南無妙法蓮華經の五字計りを一切衆生にさづけば、彼の四衆等並びに大僧等此の人をあだむ事、父母のかたき宿世のかたき朝敵・怨敵のごとくあだむべし」と記し、日蓮自らが末法に諸難を乗り越えて妙法蓮華經を弘めるべき上行菩薩であると述べていることから、以下、「3. 爾迦夷について」で説明するように上行菩薩の再誕である日蓮が爾迦夷のモデルであり、妙法蓮華經を説いた釈迦牟尼仏が鳥(梟)の世界で施身大菩薩(疾翔大力)だと考えられる。

3. 爾迦夷について

まず「爾」という漢字は、「る」とは読まないのが普通である。「じ・に」が一般的であろう。しかしながら、フランス語の「are」、すわなち、メートル法の面積の単位の一つで10メートル四方のアー(記号は「a」)を漢字を当てはめると「亜爾」となる。

また、「ルカ」という名は、『新約聖書』の『ルカによる福音書』及び『使徒言行録』の著者とされる聖人の名前である。ルカは聖人の概念を持つ全ての教派で、聖人として崇敬されている。

「迦」は釈迦の「迦」であり、釈尊の十大弟子の一人、摩訶迦葉の「迦」でもある。摩訶迦葉は大迦葉とも呼ばれ、頭陀第一であり、釈尊の滅後はその教団を率いて第一結集を行っている。

次に「夷」であるが、「夷」は東方の未開人の意味である。賢治は「疾翔大力」の教えを受けた東方の聖人として、爾迦夷という名称を想定したものと考えられる。

また、釈尊には優陀夷という弟子がおり、『妙法蓮華經五百弟子受記品第八』に、

爾時千二百阿羅漢。心自在者。作是念。我等歡喜。得未曾有。若世尊各見授記。如余大弟子者。不亦快乎。仏知此等。心之所念。告摩訶迦葉。是千二百阿羅漢。我今當現前。次第與授。阿耨多羅三藐三菩提記。於此衆中。我大弟子。憍陳如比丘。當供養。六萬二千億仏。然後得成爲仏。号曰普明如來。應供。正遍知。明行足。善逝。世間解。無上士。調御丈夫。天人師。仏。世尊。其五百阿羅漢。優樓頻螺迦葉。伽耶迦葉。那提迦葉。迦留陀夷。優陀夷。阿菴樓駄。離婆多。劫賓那。薄拘羅。周陀莎伽陀等。皆當得阿耨多羅三藐三菩提。盡同一号。名曰普明。

と記され、釈尊により將來の普明仏となることが授記される。

この優陀夷は釈尊の勸導第一の弟子とされるが、日蓮も「十八円満抄」に「上行菩薩の弘通し給ふべき秘法を日蓮先き立ちて之を弘む。身に當るの意に非ずや。上行菩薩の代官の一分なり。所詮末法に入つては天真獨朗の法門無益なり。助行には用ふべきなり。正行には唯南無妙法蓮華經なり。」と記し、末法惡世の衆生救済のために妙法蓮華經を弘通すべしと述べている。

また、『妙法蓮華經 五百弟子受記品第八』には法華七喩の一つ、衣裏珠の譬えが説かれている。この譬えは、三千塵点劫の長い間、小乗の教えに執着して苦惱から抜け出せずいた衆生が妙法蓮華經により過去の仏種を知つて目覺め、成仏するという話である。「二十六夜」の最後で三体の菩薩が穗吉を迎えに来る際に、他の梟にもその姿を現わすことで、それまで梟の坊さんが説かなかつた救済を与えることにもつながる。

優陀夷について、日蓮は「祈祷抄」に、

仏此の法華經をさとりて仏に成り、しかも人に説き聞かせ給はずば仏種をたゞせ給ふ失あり。此の故に釈迦如來は此の娑婆世界に出でて説かんとせさせ給ひしを、元品の無明と申す第六天の魔王が一切衆生の身に入りて、仏をあだみて説かせまいらせじとせしなり、(中略)皆是仏をにくむ故に。華色比丘尼を殺し、目連は竹杖外道に殺され、迦留陀夷は馬糞に埋れし、皆仏をあだみし故なり。(中略)而りといへども御悟りをば法華經と説きをかせ給へば、此の經の文字は即釈迦如來の御魂なり。一々の文字は仏の御魂なれば、此の經を行ぜん人をば釈迦如來我が御眼の如くまほり給ふべし。人の身に影のそへるがごとくそはせ給ふらん。いかでか祈りとならせ給はざるべき。

と記し、迦留陀夷(優陀夷)は釈尊が妙法蓮華經を説くために犠牲となつた一人であるとしている。この「祈祷抄」には四大声聞が『妙法蓮華經 譬喩品第三』を聴聞したことや、成仏の道理を心得て仏と妙法蓮華經に対する報恩がいかに難しいかが説かれており、普明如來(優陀夷・迦留陀夷)の授記も妙法蓮華經のおかげであると述べられている。

また、同御書には「かりと申す鳥あり、必ず母の死なんとする時孝をなす。」とも記されており、梟が親を食べるといふ逸話と真逆の報恩の譬えも説かれている。

その迦留陀夷(優陀夷)であるが、春日礼智の「六群比丘と十七群比丘」には、

迦留陀夷(Laludayi)の性格は、多く不明朗であるが、ここでは、優陀夷(Udayi)即ち、郎陀夷として出てくる。(中略)優陀夷、閻陀は多擬。(中略)三人多欲-難陀、優波難陀、優陀夷。(中略)優陀夷は、また郎陀夷と写し、迦留陀夷と區別し難く、有部律卷四十三には、我諸弟子声聞衆中、教化有情、令得聖果者、部陀夷、爲第一。と書いてあるが、なかなかの問題のあつた人である。彼は、在俗時、淨飯王の大臣として、コーサラ國に使し、波斯匿王大臣密護の妻、笈多

の美貌を見て、これと通じ、密護の死後、これを妻としたので、迦維羅衛と舎衛城に二つの邸宅を持つていた。それで、彼は、出家後も、笈多のところへ行つて説法し、旧妻善生比丘尼の誘惑を受けて、男女和合像を作つて与えたり、男女交合の像を刺繍し、他人の交情を妨げたり、女人を房舎に引き入れて、悪名、天下に流布した。しかし、彼は、結局、舎利弗の教誡に依つて、阿羅漢果を証し、勝鬘夫人の師となつたが、惜しいことに、賊帥に殺された。

と記されており、良くも悪しくも情の篤い人であり、釈尊の弟子の中では説法教化の第一人者であったことが分かる。

ここで「梟鴉守護章」にもどるが、本文には、

次に爾迦夷に告げて曰くとある。爾迦夷というのはこのとき我等と同様梟じゃ。われらのご先祖と一緒にお棲いなされたお方じゃ。今でも爾迦夷上人と申しあげて、毎月十三日がご命日じゃ。いずれの家でも、梟の限りは、十三日には楡の木の新葉を取て参て、爾迦夷上人さまにさしあげるということをやるじゃ、これは爾迦夷さまが楡の木にお棲いなされたからじゃ。この爾迦夷さまは、早くから梟の身のあさましいことをご覚悟遊ばされ、出離の道を求められたじゃげなが、とうとうその一心の甲斐あつて、疾翔大力さまにめぐりあい、ついにその尊い教を聴聞あつて、天上へ行かされた

とあることから、爾迦夷上人は疾翔大力の会座に対合衆として連なっていることがわかる。これは優陀夷が妙法蓮華經の会座に連なり、普明如来と授記されたことと同じである。

日蓮は「頼基陳状」に「日蓮聖人は御經にとかれてまします如くば、久成如来の御使ひ、上行菩薩の垂迹、法華本門の行者、五五百歳の大導師にて御座候」と記しており、日蓮宗では日蓮は上行菩薩の再誕であると考えている。この上行菩薩とは、『妙法蓮華經 從地涌出品第十五』で「仏説是時。娑婆世界。三千大千国土。地皆震裂。而於其中。有無量千万億。菩薩摩訶薩。同時涌出。是諸菩薩。身皆金色。三十二相。無量光明。」と説かれている地涌の菩薩を代表する四菩薩の筆頭であり、法華本門の対合衆でもあるため、疾翔大力に対する爾迦夷と同じである。

また、作品では主人公と同様に梟であり13日が月命日であること、仏の教えを聴聞して天上に行ったこと等が述べられているが、13日が月命日という設定が日蓮を暗示している。また、爾迦夷上人が楡の木に住んでいたため、月命日には楡の枝を飾るとあるが、日蓮系の寺院では御会式（日蓮の命日に行われる法要）に紙で作った桜の造花を飾る。これは初冬にもかかわらず、日蓮の寂滅の際に庭の桜の木に花が咲いたという伝承があるためであり、爾迦夷上人同様、ゆかりの植物を具えるのである。

その一方で、日蓮系には仏花に檜を用いる宗派もある。『真俗仏事編』の「嚴具部⑥檜供佛」によると、檜は鑑真によってもたらされ、形が天竺の池の青蓮華に似ているために仏に供すとあるなど、檜は仏教に非常にかかわりの深い植物であると言われている。

賢治が大正9（1920）年12月2日保坂嘉内宛封書に「末法の唯一の大導師 我らが主師親 日蓮大聖人」と篤く信仰する日蓮を、「三人多欲・難陀、優波難陀、優陀夷」と同格に置くことは考えられないが、「祈祷抄」に記されている優陀夷の難、つまり、末法悪世に妙法蓮華經を弘通すると『妙法蓮華經 勸持品 第十三』の「於佛滅度後 恐怖惡世中 我等當廣説 有諸無智人 惡口罵詈等 及加刀杖者 我等皆當忍 惡世中比丘 邪智心諂曲 未得謂爲得 我慢心充滿」の難に遭うことと、日蓮が受けた諸難と重ね、日蓮を法連經弘通の第一人者（上行菩薩の再誕）として爾迦夷のモデルにした

のではないかと考えられる。

その理由として、法華經の行者は「四条金吾殿御返事（此經難持御書）」に、

法華經の文に「難信難解」と説き玉ふは是なり。此の經をきゝうくる人は多し。まことに聞き受くる如くに大難来たれども「憶持不忘」の人は希なるなり。受くるはやすく、持つはかたし。さる間成仏は持つにあり。此の經を持たん人は難に値ふべしと心得て持つなり。「則為疾得無上仏道」は疑ひ無し。三世の諸仏の大事たる南無妙法蓮華經を念ずるを持つとは云ふなり。經に云はく「護持仏所囑」といへり。

とあるように、法華經の行者には死に至るような大小の難が出来するからである。

日蓮は「松野殿御返事」に、

半偈の爲めに身を投げて、十二劫生死の罪を滅し給へり。此の事涅槃經に見えたり。然れば雪山童子の古を思へば、半偈の爲に猶命を捨て給ふ。何に況や此の經の一品・一卷を聴聞せん恩徳をや。何を以てか此れを報ぜん。尤も後世を願はんには、彼の雪山童子の如くこそあらまほしくは候へ。誠に我が身貧にして布施すべき宝なくば、我が身命を捨てて佛法を得べき便あらば、身命を捨て、佛法を学すべし。（中略）迹門には「我身命を愛せず但無上道を惜しむ」ととき、本門には「自ら身命を惜しまず」ととき、涅槃經には「身は軽く法は重し、身を死して法を弘む」と見えたり。本迹兩門・涅槃經共に身命を捨て、法を弘むべしと見えたり。

と述べ、「不惜身命」の姿勢で妙法蓮華經を弘通すべきことを説き、自らも法華經の行者として四大法難を始めとする諸難に遭っている。

ところで、爾迦夷ルカに入っている「るか（ルカ）」という名は、周知のとおりキリスト教の福音史家で医師、画家の守護聖人であり、使徒パウロの協力者および随従者として活躍した聖ルカと同じである。ルカは、とくに祭司としてのキリストについて記しており、「牡牛の姿」であらわされることが多い。仏教でも『スッタニパータ』ではブッダを牡牛に譬えている。

一方、日蓮は「大白牛車書」で、

夫法華經第二の卷に云はく「此の宝乗に乗じて直ちに道場に至る」云云、日蓮は建長五三月二十八日、初めて此の大白牛車の一乘法華の相伝を申し顕はせり。（中略）抑此の車と申すは本迹二門の輪を妙法蓮華經の牛にかけ、三界の火宅を生死生死とぐるりぐるりとまはり候ところの車なり。ただ信心のくさびに志のあぶらをさゝせ給ひて、靈山浄土へまいり給うべし。又心王は牛の如し、生死は兩の輪の如し。

と述べ、妙法蓮華經（日蓮）と牛の関係を述べている。

このように、諸難に遭いながらも妙法蓮華經を末法に弘通した日蓮をモデルに、釈尊の弟子として妙法蓮華經の会座に連なり、諸難をうけながらも普明如来と授記された説法教化の第一人者である優陀夷と、イエス・キリストの福音、神のこゝばを記したルカやの名前を合わせて命名したのが爾迦夷だと考えられる。

4. 波羅夷について

波羅夷をそのまま仏教用語に当てはめると、仏教の戒律のなかで最も重い罪となる。部派仏教では比丘に四波羅夷があり、淫・盜・殺・妄の四つの罪を犯した者は懺悔しても許されないとされている。

るが、日蓮は「十法界明因果抄」に、

梵網經等の權大乘の戒と法華經の戒とに多くの差別有り。一には彼の戒は二乗七逆の者を許さず。二には戒の功德に仏果を具せず。三には彼は歴劫修行の戒なり。是くの如き等の多くの失有り。法華經に於ては二乗七逆の者を許す上、博地の凡夫一生の中に仏位に入り、妙覺に至つて因果の功德を具するなり。

と記して、妙法蓮華經を信仰することで波羅夷の罪も許され、成仏が可能であると述べている。波羅夷に発音が近い言葉に波羅蜜がある。波羅蜜とは、仏教において仏になるために菩薩が行う修行であり、『妙法蓮華經 普賢菩薩勸發品第二十八』にある普賢菩薩の四法、すなわち「一者為諸仏護念。二者植諸徳本。三者入正定聚。四者發救。一切衆生之心。」であるが、これは「就註法華經口伝」の「普賢經五箇の大事 第二不断煩惱不離五欲の事」に、

御義口伝に云はく、此の文は煩惱即菩提・生死即涅槃を説かれたり。法華の行者は、貪欲は貪欲のまゝ、瞋恚は瞋恚のまゝ、愚癡は愚癡のまゝ、普賢菩薩の行法なりと心得可きなり云云。と記されている。この教えの如くであれば、妙法蓮華經を信受することにより、梟は梟の業苦のまま菩薩行ができる、すなわち、普賢菩薩の守護をうけることができるのである。

では、波羅夷とは具体的に誰を示しているのか。上記の「法華の行者は貪欲は貪欲のまま瞋恚は瞋恚のまま愚癡は愚癡のまま普賢菩薩の行法なり」や「就註法華經口伝」の「湧出品一箇の大事 第一唱導之師の事」に、

御義口伝に云はく、湧出の一品は悉く本化の菩薩の事なり。本化の菩薩の所作は南無妙法蓮華經なり。此を唱と云ふなり。導とは日本国の一切衆生を靈山浄土へ引導する事なり。末法の導師とは本化に限ると云ふを師と云ふなり。此の四大菩薩の事を積する時、疏の九を受けて輔正記の九に云はく「經に四導師有りとは今四徳を表す。上行は我を表し、無辺行は常を表し、浄行は浄を表し、安立行は樂を表す。有る時には一人に此の四義を具す。二死の表に出づるを上行と名づけ、断常の際を踰ゆるを無辺行と称し、五住の垢累を超ゆるが故に浄行と名づけ、道樹にして徳円かなるが故に安立行と曰ふなり」。

とあることを考えると、賢治は妙法蓮華經を信受すれば四波羅夷の濁悪であっても「五住垢累を超ゆる」菩薩になれる、つまり波羅夷であっても妙法蓮華經を信仰することで「清浄」になれることを示唆したかったのではないだろうか。

そして、この「清浄」とは日蓮の「十界曼荼羅」の上行菩薩の反対側に位置する「常樂我浄」の「浄」を現す浄行菩薩を示しているのではないかと考えられる。日蓮宗では上行菩薩は「常樂我浄」の「我」であり「妙法蓮華經」の久遠実成であるとされ、浄行とは『薬王品』の「如清涼地」が浄の徳を明かしているとされている。

「二十六夜」では仏教の輪廻転生を念頭に置き、梟は殺生の業により梟としてまたこの世に生まれてくるとあるが、これは「常」である。そして、他の命を奪うことは波羅夷の罪であることから、即身成仏のためにはその「五住垢累」を超えなければならないため、梟には「浄」が必要なのである。

また、上行菩薩、浄行菩薩をはじめとする地湧の菩薩は「是諸菩薩身皆金色。三十二相無量光明」(『妙法蓮華經 従地湧出品第十五』)であり、本文にある「金いろの立派な人」と同じ容姿をしている。

5. 二十六夜信仰と菩薩

「二十六夜」とは、二十六夜講、二十六夜待ち等と言われ、陰暦の一月と七月の二十六日に出る月を拝むことであり、月光に阿弥陀如来・観音菩薩・勢至菩薩の姿が現れるという。

ところで、『法華文句』には「名月は寶吉祥月天子。大勢至應作。普香是明星天子。虚空藏應作。寶光是寶意日天子。觀世音應作。」とある。名月天子は月天子として大勢至菩薩の応作、香天子は明星天子として虚空藏菩薩の応作、宝光天子は日天子として観世音菩薩の応作であると説かれており、この日天子、月天子、明星天子はまた三光天子とも言われている。応作とは仏や菩薩が衆生を救済するため、相手の性質・力量に応じて姿を変えて現れることをいう。

『仏説観無量寿経』には大勢至菩薩に関して、「以智慧光、普照一切、令離三塗」「此菩薩行時、十方世界、一切震動。當地動處」とあり、大勢至菩薩の救済は三塗（三途。三悪道のこと）にも及ぶとあるため、当然殺生を続ける梟にも当てはまる。また、歩くと十方世界が一切に振動するとあることから、疾翔大力のはばたきのような力強さをも備えている。

また、『妙法蓮華経序品第一』に「復有名月天子。普香天子。宝光天子。四大天王。与其眷属万天子俱。」とあるため、大勢至菩薩も観世音菩薩も三光天子も法華経の会座に名を連ねていることがわかる。

これら三光天子については、『法師品』に、

爾時世尊。因藥王菩薩。告八万大士。藥王。汝見是大衆中。無量諸天。龍王。夜叉。乾闥婆。阿修羅。迦楼羅。緊那羅。摩・羅伽。人与非人。及比丘。比丘尼。優婆塞。優婆夷。求声聞者。求辟支仏者。求仏道者。如是等類。滅於仏前。聞妙法華経。一偈一句。乃至一念随喜者。我皆与授記。当得阿耨多羅三藐三菩提。

として記され、『宝塔品』では、

諸善男子 於我滅後
誰能受持 読誦此経 今於仏前 自説誓言
此経難持 若暫持者 我即歡喜 諸仏亦然
如是之人 諸仏所歎 是則勇猛 是則精進
是名持戒 行頭陀者 即為疾得 無上仏道
能於来世 読持此経 是真仏子 住淳善地
仏滅度後 能解其義 是諸天人 世間之眼
於恐畏世 能須臾説 一切天人 皆応供養

と記されており、釈尊の滅後の法華経流布の勅を蒙り、『囑累品』で「諸菩薩摩訶薩衆。如是三反。俱発声言。如世尊勅。当具奉行。唯然世尊。願不有慮」と誓言している。

一方、『妙法蓮華経 第二十常不軽菩薩品』では、久遠実成の釈尊から得大勢至菩薩（大勢至菩薩）に説く形態で常不軽菩薩の故事や行法が示されており、日蓮宗では、その智慧の光が普く一切を照らし、三悪道から抜け出せる勢至の力は不軽菩薩の実践を末法に行う上行菩薩等を守護するものと考えられている。大勢至菩薩も観世音菩薩も普賢菩薩も三光天子も諸菩薩・諸天善神も末法に出現し、妙法蓮華経を弘通する上行菩薩の再誕である日蓮とその弟子旦那を諸難から守護する存在なのである。

4. 結論

賢治が大正9(1920)年12月2日に親友保坂嘉内に宛てた封書には国柱会信行部に入会した旨が記されているが、大正7(1918)年ごろの書簡を見ると、賢治はすでに熱心な法華経信仰者であったことがわかる。

大正9年夏ごろの編と推定される「攝折御文、僧俗御判」は国柱会主宰者の田中智学の『本化攝折論』および『日蓮聖人御遺文』からの抜き書きであることは周知の事実であるが、その後、賢治の日蓮信仰はますます深まり、翌大正10(1921)年には家出し上京して国柱会を訪問、その際に高知尾智耀から「法華文学ノ創作」をすすめられ、自活しつつ国柱会奉仕活動を行い、法華文学の創作を決意したとされている。

田中智学は『本化妙宗信条』第7条で、「他教異宗の教義又は祭祀を信仰し、及び之に供養することを厳禁すべし。国家郷党の典礼に属する国儀例俗の祭祀にして、宗教以外のものはおのずから本条の外とす」と述べていることから、賢治が大正11年から12年ごろに阿弥陀三尊を信仰するような作品を創作するとは考えにくい。

「二十六夜」は仏教的な要素の強い作品であり、特に梶の坊さんが説く「梶鴉守護章」は殺生の業について繰り返し描かれているが、その救済については説かれていない。しかしながら

唯願うらくはかの如来大慈大悲我が小願の中に於て大神力を現じ給い妄言綺語の淤泥を化して
光明顕色の浄瑠璃となし、浮華の中より清浄の青蓮華を開かしめ給わんことを。至心欲願、南無
仏南無仏南無仏

と説いて、「妄言綺語の淤泥(妄語は仏教の十悪の一つで事実無根の嘘をつくこと、綺語は心にもないお世辞を言うことから正しい教えない梶の世界)」に、東方にある薬師如来の浄土で汚泥の中より出ずる青蓮華(日蓮の誕生時に、安房小湊の蓮華ヶ淵に時ならぬ青蓮華が咲き誇ったという伝承があり、また、仏菩薩の眼をあらわす華)を開花させてほしいと祈る。

一般に菩薩が手にしている蓮華はつぼみであり、これは悟りを約束されていながらも未だ菩薩行を行う「未開敷蓮華」をあらわしており、修業を経て悟りを得た状態を表現したものを「開敷蓮華」ということから、「清浄の青蓮華を開かしめ給わんことを。至心欲願」という梶の願いが込められているのであろう。作品中で梶の坊さんが説いている「梶鴉守護章」は因果応報による三悪道を輪廻転生する苦しみ、正法に巡り合えない苦悩と救済への祈りだからである。

穂吉の臨終の場面では、皆が鳥世界の釈尊と思われる疾翔大力の御名を唱えていることから、金色のひときわ大きな施身大菩薩は、賢治が大正9(1920)年12月上旬保坂嘉内宛封書に記した「妙法蓮華経如来 即ち寿量品の釈迦如来」であり、爾迦夷上人は上行菩薩の再誕である日蓮だと考えられる。

「攝折御文、僧俗御判」にも「南無妙法蓮華経は空間に充滿する白光の星雲です。その白光の星雲である南無妙法蓮華経を自分自身の心の中に包むことによって、自分は釈尊のおぼしめしと日蓮聖人の慈悲を表現していかなければならない」とある。

では、もう一人の菩薩はだれか。

疾翔大力は大菩薩であるため、鳥の世界における釈尊を表しており、日蓮が上行菩薩の再誕であるとする日蓮宗の解釈からも、上行菩薩は日蓮となる。

一方、「十界曼荼羅」にある釈迦如来の隣に位置する多宝如来は『妙法蓮華経 見宝塔品第十一』

で出現し、釈尊の説いた法華経が真実であることを証明する役割があるものの、上行菩薩を筆頭とする地涌の菩薩が、末法において妙法蓮華経を流布する件とは直接関係しないため、「二十六夜」で必要とされている梟の救済に直接かかわってはいない。

また、四菩薩に関しては、「就註法華経口伝」の「湧出品一箇の大事 第一唱導之師の事」に、

御義口伝に云はく、涌出の一品は悉く本化の菩薩の事なり。本化の菩薩の所作は南無妙法蓮華経なり。此を唱と云ふなり。導とは日本国の一切衆生を靈山浄土へ引導する事なり。末法の導師とは本化に限ると云ふを師と云ふなり。此の四大菩薩の事を釈する時、疏の九を受けて輔正記の九に云はく「経に四導師有りとは今四徳を表す。上行は我を表し、無辺行は常を表し、浄行は浄を表し、安立行は楽を表す。有る時には一人に此の四義を具す。二死の表に出づるを上行と名づけ、断常の際を踰ゆるを無辺行と称し、五住の垢累を超ゆるが故に浄行と名づけ、道樹にして徳円かなるが故に安立行と曰ふなり。

と記されていることから、「我」である上行菩薩と「浄」である浄行菩薩で「我浄」となり、殺生の罪にさいなまれていた梟が恋焦がれた「我浄」が叶うこと、そして「十界曼荼羅」での位置を考えると、波羅夷は浄行菩薩となる。

そして、『妙法蓮華経 従地湧品第十五』にある地涌の四菩薩は「是諸菩薩身皆金色。三十二相無量光明」と記されており、全身が金色で三十二相を具えていることから、「二十六夜」に登場する「金いろの立派な人」は悟りを開く為の修行中の菩薩ではなく、地涌の四菩薩のように、悟達し既に仏界へ昇った如来が末法救済のために九界へ降り立った大菩薩であると考えるのが妥当であろう。

では、なぜこれらの菩薩がそれほど重要なのかについて日蓮は「開目抄」に、

其の上に地涌千界の大菩薩大地より出来せり。釈尊に第一の御弟子とをばしき普賢・文殊等にもなるべくもなし。華嚴・方等・般若・法華経の宝塔品に來集する大菩薩、大日経等の金剛薩埵等の十六の大菩薩なども、此の菩薩に対当すれば獼猴の群る中に帝釈の來り給ふがごとし。山人に月卿等のまじわるにことならず。補処の弥勒すら猶迷惑せり。何に況んや其の已下をや。此の千世界の大菩薩の中に、四人の大聖まします。所謂、上行・無辺行・浄行・安立行なり。此の四人は、虚空靈山の諸菩薩等、眼もあはせ心もをよばず。華嚴経の四菩薩、大日経の四菩薩、金剛頂経の十六大菩薩等も、此の菩薩に対すれば翳眼のもの、日輪を見るがごとく、海人が皇帝に向かひ奉るがごとし。大公等の四聖の衆中にありしににたり。商山の四皓が惠帝に仕へしにことならず。巍巍堂堂として尊高なり。釈迦・多宝・十方の分身を除いては、一切衆生の善知識ともたのみ奉りぬべし

と記している。

そしてこの四菩薩は、「就註法華経口伝」の「湧出品一箇の大事 第一唱導之師の事」に、

此の四大菩薩の事を釈する時、疏の九を受けて輔正記の九に云はく「経に四導師有りとは今四徳を表す。上行は我を表し、無辺行は常を表し、浄行は浄を表し、安立行は楽を表す。有る時には一人に此の四義を具す。二死の表に出づるを上行と名づけ、断常の際を踰ゆるを無辺行と称し、五住の垢累を超ゆるが故に浄行と名づけ、道樹にして徳円かなるが故に安立行と曰ふなり。

と記されている。「常楽我浄」とは、仏の境地に具そなわる四つの徳のことで、四徳または四徳波羅蜜ともいわれ、賢治の「雨ニモマケズ手帳」60ページには「十界曼荼羅」の中心部、すなわち、曼荼

羅の中心である「南無妙法蓮華經 日蓮」の左隣に南無釋迦牟尼佛、その左に南無淨行菩薩、その左に南無安立行菩薩、「南無妙法蓮華經 日蓮」の右隣に南無多寶如來、その右に南無上行菩薩、その右に南無無邊行菩薩が記されている。ちなみに、この略式曼荼羅の前には有名な「雨ニモマケズ」が記されており、この略式の曼荼羅は賢治にとって「十界曼荼羅」同様に祈りの対象であったと考えられる。

その一方で、土佐秀信によって描かれた仏画集である『仏像図彙』（元禄3（1690）年刊 国立国会デジタルコレクション）には、地涌の四菩薩に関して、上行菩薩・無邊行菩薩（見出し部分：上行・無邊行、仏像図彙所収箇所：巻2 18丁裏）と淨行菩薩・安立行菩薩（見出し部分：淨行・安立行、仏像図彙所収箇所：巻2 18丁裏）の二体を一体化した図がある。賢治も土佐秀信同様、上行菩薩と無邊行菩薩を一体化させ、淨行菩薩と安立行菩薩を一体化して四菩薩を表現したのかもしれないが、どちらにしても、「十界曼荼羅」の妙法蓮華經による救済が穂吉に訪れたことは確かである。

筆者は当初、「金いろの立派な」三人の人は、「四条金吾釈迦仏供養事」に、

三身の事、普賢經に云はく「仏三種の身は方等より生ず。是の大法印は涅槃海を印す。此の如き海中より能く三種の仏の清浄の身を生ず。此の三種の身は人天の福田にして応供の中の最なり」云云。三身とは一には法身如来、二には報身如来、三には応身如来なり。此の三身如来をば一切の諸仏必ずあひぐす。譬へば月の体は法身、月の光は報身、月の影は応身にたとふ。一の月に三のことわりあり。一仏に三身の徳まします。この五眼三身の法門は法華經より外には全く候はず。故に天台大師の云はく「仏三世に於て等しく三身有り諸教の中に於て之を秘して伝へず」云云、此の釈の中に於諸教中とかゝれて候は、華嚴・方等・般若のみならず、法華經より外は一切經なり。秘之不伝とかゝれて候は、法華經の寿量品より外は一切經には教主釈尊秘して説き給はずとなり。

と記されているように「仏の三身」であると考えていた。しかしながら、「仏の三身」とは仏の徳であるため、「黄金の船」のように見える月に「金いろの立派な人が三人まっすぐに立って」いるという表現から人物（〇〇菩薩等）であると考えなおし、また、真ん中の背も高く大きな眼の人が捨身大菩薩とあることから、菩薩の位を考え、捨身菩薩と施身大菩薩の差異、そして、疾翔大力（施身大菩薩）・爾迦夷・波羅夷についてはそれぞれの名称や特性など調べてそのモデルから賢治の意図を考察した。

また、この作品が書かれたとされる大正11年から12年にかけて、賢治は自らが「修羅」であったとして作品や書簡等に記しており、しかもその葛藤のさなかに最愛の妹であるトシが亡くなってしまうという悲劇が起こっている。そのような状況の中で、自らの葛藤に決着をつけたことを述べているのが、「青森挽歌」や「オホーツク挽歌」の一連の挽歌群である。

唯一の同志であり、敬愛すべき存在でもあった妹を救う術もなく、その成仏を確信させることさえできなかった賢治が、無垢な子梟の穂吉を妹のトシに見立て、妙法蓮華經により成仏させたのがこの作品ではないだろうか。

梟は殺生の罪により苦しんでいるが、賢治は「就註法華經口伝 上」の「序品七箇の大事 第七天鼓自然鳴の事」に「念仏無間・禪天魔・真言亡国・律国賊と喚ふる事は無間自説なり。三類の強敵来たる事此の故なり。」と説かれていることから、当時の宮沢家が熱心な浄土真宗であったため家族

が無間地獄に堕ちぬようにしなければならぬと考えていた可能性があり、自らの意思では未だ殺生もできず、悲惨な目に遭いながら誰も憎むことなく昇天した子梟の穂吉と、賢治とともに妙法蓮華経を信じたが早逝してしまったトシを重ね合わせ、妙法蓮華経による転重軽受で成仏できるよう祈りを込めてこの作品を描いたのではないだろうか。

妙法蓮華経の教えとは、日蓮の十界曼荼羅である。鳥世界を救済する存在が疾翔大力であることを考えると、法華経を説いた釈尊が鳥世界の疾翔大力であるならば、その教えを末法に弘通する存在が地涌の菩薩である。日蓮は自らを四菩薩の中の上行菩薩の再誕としているため、13日が月命日である爾迦夷は日蓮となる。また、もう一体の金いろの人は殺生という波羅夷をも浄化させる妙法蓮華経の「浄」の功德をあらわし、上行菩薩と対になって記されている浄行菩薩になると考えた。そして、上行菩薩と浄行菩薩とで「我浄」となり、穂吉やトシの成仏のみならず、梟や賢治自らの罪も清浄され、妙蓮華経により救済されることになる。

また、日蓮は「妙一女御返事」で、

然るにさばかりの上代の人人だにも即身成仏には取り煩はせ給ひしに、女人の身として度々此くの如く法門を尋ねさせ給ふ事は偏に只事にあらず、教主釈尊御身に入り替はらせ給ふにや。竜女が跡を継ぎ給ふか、又嬌曇弥女の二度来れるか。知らず、御身は忽に五障の雲晴れて、寂光の覚月を詠め給ふべし。

と記し、教主釈尊による救済と仏の悟り（智慧）を、闇を照らす月の光明にたとえているため、「二十六夜」の最後の場面とも一致する。

以上のように、「二十六夜」に登場する疾翔大力は鳥世界の釈尊、爾迦夷は鳥世界における上行菩薩である日蓮、波羅夷は清浄の徳を持つ鳥世界の浄行菩薩であり、この作品は鳥世界での妙法蓮華経による謗法罪障消滅と救済を記したものであると考察した。

参考資料)

宮沢賢治『【新】校本宮沢賢治全集』1-16巻及び補巻 筑摩書房 1995年12月-2009年3月

『平成新編 日蓮大聖人御書』第2版 大石寺 1990年

島地大等『漢和対照 妙法蓮華経』ニチレン出版 2001年4月

『日蓮聖人遺文辞典』身延山久遠寺 2003年10月

『織田佛教大辞典』大蔵出版株式会社 2000年6月

中村元『仏教語大辞典』東京書籍 1985年6月

『大正新修大蔵経』（SAT大正新脩大蔵経テキストデータベース）<https://21dzk.lu-tokyo.ac.jp/SAT/> 2022年9月4日16時20分最終閲覧

田中智学『日蓮主義教学大観』天業民報社出版部 大正14-15年 国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/infondljp/pid/971169> 2022年9月4日16時21分最終閲覧

『WEB版新纂浄土宗大辞典』浄土宗大辞典編纂実行会 <http://jodoshuzensho.jp/daijiten/index.php> 2022年9月4日16時22分最終閲覧

『日蓮上人遺文辞典 教学篇』総本山身延山久遠寺 2003年10月

中村元『広説佛教語大辞典 縮刷版』東京書籍 2020年7月

『訓読摩訶止観弘決会本 中』大日蓮出版 2000年11月

杉浦静『「二十六夜」考』『国文学 解釈と鑑賞 第51巻12号』至文堂 1986年12月

- 呉善花「宮沢賢治『二十六夜』論」『注釈と批評1』注釈と批評の会 1994年1月
- 小埜裕二「宮沢賢治『二十六夜』論」『上越教育大学研究紀要 第24巻2号』上越教育大学 2004年12月
- 伊藤賢二郎「『二十六夜』のバラレル」『米澤ポランの廣場』1999年 米澤ポランの廣場
- 呉善花「『二十六夜』におけるカルマ」『国文学 解釈と鑑賞第68巻9号』至文堂 2003年9月
- 伊藤眞一郎「増殖する謎としての想—『二十六夜』と『銀河鉄道の夜』をめぐって—」
『論叢宮沢賢治4号』中四国宮沢賢治研究会 2001年10月
- 『宮沢賢治の全童話を読む』（『國文學増刊』）2003年5月
- 大島丈志「法華経文学としての『二十六夜』考—梟の悪業に出口はあるのか—」『文教大学国文 34号』2005年3月
- 荒木浩「『二十六夜』の信仰と捨身」『宮沢賢治と共存共栄の概念：賢治作品の見直し 国際学会報告集』Northern
Book Centre 2014年
- 牧野 静「賢治童話における殺生の問題：田中智学『本化妙宗式目講義録』を手がかりに」『倫理学 33巻』筑波大学
倫理学研究会 2017年3月
- 森章司・木澤綱夫「【論文4】由旬の再検討」『中央学術研究所紀要n.6』中央学術研究所 2002年10月
- 土佐秀信『仏教仏像図1、2』コマ番号32/38（文彫堂（明治19年6月）国立国会デジタルコレクション
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/818765> 2022年9月4日16時27分
- 宗教法人 国柱会 <http://www.kokuchukai.or.jp/about/> 2022年9月4日16時28分最終閲覧

A Study on the three Bodhisattvas Appearing at Kenji Miyazawa
Children's Story “二十六夜”

TAKAHASHI Naomi

Abstract

The three golden bodhisattvas in Kenji Miyazawa's fairy tale “Twenty-six Nights” appear with the moon on the twenty-sixth night. About these three golden bodhisattvas, an owl monk says, “When the moon rises from the mountain, the moonlight shines beautifully, and the three bodhisattvas, Yisho Dairiki and Nikaibaraji, appear in the eastern sky. Although there have been many studies on the identity of these three bodhisattvas, most of them are based on the “Amida Nyorai Raigo-zu” as their source material.

Therefore, this paper examines the names of the three bodhisattvas, 疾翔大力, 爾迦夷 and 波羅夷, and their significance with reference to the teachings, Buddhist scriptures, and the Buddhist theories of Nichiren, that Kenji believed in.

As a result, I assumed that the three Bodhisattvas in “Twenty-Six Nights” are only in the world of owls, and that 疾翔大力 is Shakyamuni Buddha, 爾迦夷 is Nichiren, the reincarnation of 上行菩薩, and 波羅夷 is 淨行菩薩 with the virtue of purity. Kenji also believed that his intention was his sister Toshi attained Buddhahood through 「妙法蓮華經」. Thereby he included annihilating the slanderous sins and obstacles of sentient beings. In the “妙法蓮華經 化城喻品第七”, it is taught that “we and all sentient beings will all attain Buddhahood,” and Kenji wished to spread this merit to all sentient beings so that they would all attain Buddhahood together.

Keywords: 二十六夜、疾翔大力, 爾迦夷, 波羅夷, Nichiren, Honzon, Shakyamuni Buddha, 上行菩薩, 淨行菩薩, Entering Nirvana, extinguishment of sins and disasters, All things become Buddha.